

近世関宿藩士奥原氏二家の家譜について（考察）

中村正己

一 関宿藩主久世廣之の母奥原日向經重の家譜について

関宿藩久世氏の初代藩主廣之の父は廣宣ひろのぶ、母は今川家の家臣奥原日向經重の娘であった。廣之は、慶長十四年（一六〇九）武蔵野国多摩郡南澤村（現東久留米市）で久世廣宣の三男として生まれた。母方の奥原家の家譜については次のとおりである。

奥原家は、そもそも藤原時代、駿河国の国司駿河前司藤原統勝の支流であった。統勝は永観二年（九八四）四月駿河国益頭山で源朝臣攝津守多田満中と対戦し、戦死してしまった。子の勝種、勝治、勝忠と承継され、この時に二男の勝治は奥原左橋、三男の勝忠は奥原右橋と氏姓名が変わり、奥原氏が生まれたと伝えている。

因みに兩名の名付けの由来は、南北朝時代の観応年中（一三五〇〜五二）に、今川貞世（一三二六〜？）が足利氏の下知により、今川直義征伐に加わり凱旋の時「橘樹の枝を兄弟二人で手折れたならば兄（勝治）の枝は悉く左に折れし弟（勝忠）の枝は右に手折れた。」この時にそれぞれの名を左橋、右橋と名付けた。また、勝治は橋左折れの家紋、勝忠は橋右折れの家紋にしたという逸話が残る。

二代目勝興（作十郎）、三代目勝継（又次郎）、四代目勝益（作

右衛門）は室町時代の宝徳年中（一四四九〜五二）に駿河国安倍郡横田之郷（現静岡市横田町）で蟄居した。

五代目勝房（作右衛門尉）は、明応年中（一四九二〜一五〇一）に朝比奈氏の支配下に属し、戦功あつて今川家に仕えた。

駿河国の朝比奈氏は、始称が朝比奈肥後守泰盛で永正年中（一五〇四〜二一）に駿河・遠江の守護大名今川氏親（一四七三〜一五二六）の家老職を務めていた。

六代目勝重（作十郎）は、駿河・遠江国の戦国大名今川氏親うじちか（一四七三〜一五三六）の臣であった。又、母は藤枝城主（現静岡県藤枝市）杉森氏の出所である。勝重は天文十四年（一五四五）正月二十日に死没し、法名が「善性院殿加賀守日意」である。

七代目經重つねしげ（又次郎）は、後に日向守ひつがのりとなった。母は、中原次郎左エ門行長の娘で父勝重の室である。駿河国田中城の守護今川氏親の三男義元（一五一九〜六〇）に仕えた。義元討死後、城代朝比奈駿河守氏秀（後の藤枝城主・興国寺城主）が駿河国持舟（又は用舟とも記す）（現静岡市）に在城の時に、經重は武田信玄に属し、与力となった。永禄十一年（一五六八）三月に織田信長が伊勢、三河、駿河方面に侵入してきた時、經重と氏秀は五百余兵を引率して持舟城に籠城した。

天正十年（一五八二）二月に信長が持舟城を取囲んだ時、城

主氏秀と経重は防戦した。その結果、氏秀・経重両名は甲斐の国へ退陣し、同年三月十一日に両名は没した。経重の法名は「本行院殿日向守日詮」である。

経重の長女は、寛永十三年（一六三六）二月十三日に病死し、法名は、「妙悦」である。

三年後の同十六年（一六三九）二月二十一日に久世廣宣（三郎・三左衛門）の室であった次女も病死した。法名は「常連院」である。

三女は、武田家の臣富田定雙（市左衛門・定友）に嫁いでいる。定雙は富田家の始祖で、出身本国が播磨国（現兵庫県）である。久世廣宣とは姉妹の夫同士（相婿）の關係にあたった。代々関宿藩の久世家に仕えて家老職や城代格を務めた家格であった。石高も七百石から千石を有していた。

八代目勝久は、父が今川家の臣滝三郎左衛門宗能である。勝久は、寛永七年（一六三〇）十一月五日に持舟に於いて病死し、法名は「宗閉日義」である。

九代目勝義（又次郎）は幼名を満橋と称した。持舟に住み、正保三年（一六四六）に久世廣之が駿河国久能山へ巡視を命じられた時の頃は、本陣に於いて時服を拝領している。

また、寛文元年（一六六一）に廣之が、京への御使を命じられた時は、三十人扶持で相模国津久井陣屋の役人を命じられている。寛文十年（一六七〇）七月二十一日に没し、法名が「勝光院日道」である。

津久井陣屋と関宿藩飛地領について

相模国の関宿藩領は、寛文九年（一六六九）に藩主久世廣之が関宿に就任する前から天和三年（一六八三）八月に藩主久世重之が備中庭瀬藩に転封する迄、相模国四郡四十八か村で所領高が一万二千八百石余であった。これら関宿藩の飛地領を支配する役所として津久井（現相模原市）に陣屋が設けられていた。

十代目勝乘（又兵衛）は、津久井に在住した。寛文十年（一六七〇）八月五日に父勝義の家督三十人扶持を継いだ。天和三年（一六八三）九月二十二日には、つねづね母の非道に耐えられず、剃髪して出奔し、甲斐国身延山久遠寺へ入寺して、号を宗仙とした。この頃、勝乘一家は離散し、母方の生地駿河国安西（現静岡市）に移った。後に持舟へ再移住している。宝永二年（一七〇五）二月十五日勝乘六十二歳で没した。法名は「實成院宗仙日量覺位」である。廟所が駿河寺本行院である。

十一代目勝直（又之助）は、後に丹右エ門、郡右エ門、三太夫と改名した。貞享五年（一六八八）年に持舟で生まれ、享保十三年（一七二八）五月十七日に関宿へ帰参した。扶持は五両二口で徒士に召出され、中小性、給人、御金方を務めた。明和五年（一七六八）五月十七日に関宿で没し、八十一歳であった。法名は、「稟光院智用日照居士」である。

十二代目勝秀（安次郎・又次）は、後に三太夫を襲名した。江戸深川に生まれ、明和五年（一七六八）に家督を継いだ。扶持米は五十俵二口、御目付、御金方、勘定頭の役職を務めた。天明八年（一七八八）に前述のいづれかの役職と扶持米八十俵の内三十俵を取り上げられた。（召放）減石された理由は不明である。その後加増され扶持米が八十俵（三十二石）となった。

十三代目勝信（八十橋）は、寛政三年（一七九一）に家督を継ぎ、寛政十年（一七九八）六月二十五日没する。法名「厚侃院如用日敬居士」である。

十四代目経驥（繁之助）は、文化六年（一八〇九）八月十七日に没し、法名が「達心院觀考日清居士」である。

十五代目又三郎（経周）は、文化七年（一八一〇）七月十三日に没し、法名が「髓縁院蓮成日了居士」である。

十六代目三太夫（重善）は、弘化四年（一八四七）八月十一日に没し法名が「不変院中道日具居士」である。

十七代目経興（貞吉・良助）は、明治二十二年（一八八九）

二月十二日に没し、法名が「法雲院長登日住居士」である。
十八代目小太郎は、経営を長男に持ち、明治四十二年（一九〇九）九月二十三日に没した。法名は「智明院勇行日盛居士」である。

十九代目経営は、謹爾を長男に持ち、昭和十二年（一九三七）三月三十一日に没した。法名は「春溪院浄雲三熔養日當居士」である。

二十代目謹爾は、平成四年（一九九二）一月七日に没し、法名は「文崇院清二耀謹雅日爾居士」である。「関宿志」の著者に当たる方である。

二 明治期日本南画巨匠奥原晴湖と奥原家の家譜について

（一）奥原晴湖の生い立ちについて

晴湖は、天保八年（一八三七）八月十五日に父古河藩士池田政明・母きくの四女として下総国古河城下西片町（現古河市錦町）に生まれた。名は節・セツ（「せいこ」と通称されたといふ）。父は、古河藩の永代家老小杉長兵衛の分家にあたる小杉寛長の次男数馬（別名政明）で、文化七年（一八一〇）に池田家へ石高三百三十石で養子に入った。文政・天保年間（一八一九〜四〇）に亘り、古河藩大番頭、弓術世話役、使番、先手鉄砲、弓掛指南等の役職を務めた。数馬の妻は、先妻が病死したのち、後妻はわけあって離縁となった。数馬はその後に古河藩士石高二百二十石取りの山中金左衛門の長女きくと縁組した。因みに山中金左衛門の妹は、江戸中期に蘭医として活躍した古河藩医官河口信任の妻である。

（二）池田家について

始祖の弥惣右エ門は、戦国武将織田信長の家臣西條藤左エ門の次男である。元禄十三年（一七〇〇）九月二十七日に養子に入り家督を得た。そして池田弥惣右エ門は石高三百三十六石取

りで古河藩士となった。

二代目求馬は延享四年（一七四七）に出奔（出奔した理由はわからず）したことにより、その後国府田孫太夫の次男政久を養子に迎えて家督を継がせた。政久は宝暦四年（一七五四）に古河藩家老職を務め、明和三年（一七六六）七月二十二日に病没した。

三代目弥三郎は浦野家から宝暦二年（一七五二）に養子に入るも出奔した。政久の後継者として、小杉多門（寛長の祖父）の次男多左衛門を天明五年（一七八五）十月八日に養子とした。多左衛門は隠居後、号を蓬山と改めた。天保四年（一八三三）九月十四日に病死した。この間、藩の御目見、鉄砲改、用人を務めた。

四代目は、晴湖の実夫である数馬（政明）が小杉家より養子に入り、池田家を継いだ。以後、池田家は、五代目繁太郎、六代目多喜雄、七代目道夫達が承継した。また、奥原家の養子である正夫は七代目道夫の弟であり、平成元年（一九八九）に七十七歳で病没した。

（三）関宿藩の奥原家について

奥原家の始祖の源次左衛門についての家譜は不明である。

二代目源次左衛門廣備は、『新訂寛政重修諸家譜』によると関宿藩主久世廣明の六男として、宝暦十一年（一七六一）十二月三日に関宿藩江戸中屋敷の小日向邸こひなたに生まれた。通称勇吉または、主水と呼ばれていた。後に久世家の養子に入った。明和六年（一七六九）八月十九日、廣備が八歳の時、浦賀奉行久世丹後守（廣民）の養子となった。安永五年（一七七六）にはじめて徳川家治に拝謁した。後に廣備は離縁し、兄廣譽の許へ帰り、その後奥原源次左衛門家に養子に入った。そして源次左衛門を襲名した。寛政元年（一七八九）三月二十九日没した。享年二十八歳。菩提寺は関宿実相寺（現千葉県野田市関宿）である。石塔の正面には「顯理院本事了道日實居士」の法名と左側には

前述の没年月日並びに「奥原氏源廣備廟」「俗名奥原正五郎」と刻まれている。

三代目帯刀廣尚は寛政九年（一七九七）二月五日に閑宿藩家老富田外記（定房）の次女と婚姻し、同年九月八日に久世廣誉の家臣となり、石高二百石を賜った。文化十一年（一八一四）四月二十九日に死没し、法名は「理性院了土日道居士」である。なお、帯刀の幼少名は勇治と称した。

四代目帯刀廣望は、後に源次左衛門と名を改めた。妻は古河藩主土井利勝家臣の小杉角兵衛の妹である。（晴湖の叔母に当たる方である）帯刀廣望の没年は嘉永三年（一八五〇）三月十七日で、法名は「壽本院徹道日理居士」である。閑宿実相寺に葬られている。

（四）晴湖が奥原家に養女になった理由について

奥原晴湖略年表「茨城県歴史館『奥原晴湖展図録』」によると元治二年（慶応元年）春、「晴湖」が二十九歳の時に、奥原源次左衛門帯刀の養女に入ると記されている。なお、奥原家の養女となった理由については、古河藩において婦女子が藩外出ることは禁じていたことにより、父政明の妹の嫁ぎ先である奥原家に入り、江戸で画家として身を立てることになったとされている。（奥原晴湖展没後百年記念「古河歴史博物館図録」）

また、晴湖が源次左衛門帯刀の養女に入ったとされる元治二年は、前述のとおり源次左衛門帯刀（廣望）が既に他界していることから、帯刀への養女に関して疑問を抱くところでもある。因みに、晴湖は養女になるまでの間、絵画を枚田水石に師事し漢学を芽根一鷗に学んでいる。

（五）奥原家と岡野梅老について

奥原家の家系によると二代目奥原源次左衛門廣備の娘は、古河藩土岡野梅老の妻として岡野家に入籍している。梅老は岡野家の八代目に当たる方で、別名を「司馬」と称した。文化年間から天保年間にかけて古河藩の作事奉行並びに目付兼帯船奉

行を務めた人である。また、幼少の頃より父同様、絵画に優れており、江戸後期の日本画家谷文晁（一七六三〜一八四〇）に絵画を学び、「梅花」画や「山水」画を得意としたと伝えられている。

嘉永七年（一八五四）に米国船が来航した際は、古河藩家老と共に出府し、古河藩に課せられた江戸防備の役目を務めた。

（六）晴湖の出府について

晴湖は、古河藩を脱藩し、池田の姓を捨て、奥原家に養女になるといふ悲壮な覚悟で親族に反対されながらも両親に願った。晴湖の熱意と、古河藩婦女子出府に関する藩規の事情にもかかわらず、閑宿藩に入藩した。そして元治二年（一八六五）の春に江戸川を船で下って、江戸へ出ることとなった。西閑宿（現幸手市）までは弟の池田直之助と、晴湖の付き添い人として武蔵国埼玉郡上川上村（現熊谷市）名主の稲村留八（幼名は富八）が付き添った。上川上村は、古河藩主土井利位が大塩の乱を鎮定した時に、褒賞として一万石余を幕府より拝領された領地である。（藩の飛地領）名主の留八は親の弥五郎右衛門より石高勘定見習を引き継いで、後に貫一郎と称したと伝えられている。後述する晴湖が隠棲生活の場を定めた地がこの地である。

更に、晴湖亡き後、晴湖の甥で池田家当主多喜雄の末子正夫が養子となり、奥原晴湖家を継いでいる。最初に稲村貫一郎が後見役を務めたことは、終世両家が親密な関係にあったと考えられる。

晴湖は、身の回りの世話役として古河から下女のおでんと共に西閑宿の地を離れたのである。これを物語る記念碑が西閑宿の「第六神社」（現幸手市）に建立されている。この地には江戸時代から近代まで閑宿内河岸、閑宿向河岸及び向下河岸の三河岸があり、行き交う川船で賑わった所である。記念碑は、正面に「奥原晴湖」の揮毫で、「第六神社」「面足尊惶根尊」（お

もだるのみことかしこねのみこと」と堂々たる、自由闊達な趣のある篆書の文字が刻まれている。

この記念碑の撰文者の薄井龍（又は竜）之（一八二九〜一九一六）は、信濃国飯田の出身で天狗党の志士として筑波山挙兵に参加した一人である。上京の途中に、小諸藩士に捕らえられたが、脱走し、明治維新後に司法官となった。薄井は、元勲の萩藩士木戸孝允（一八三三〜七七）と交流があったことにより、晴湖も親しい間柄であった木戸を介して依頼したものであると思われる。

記念碑の建立年月は、晴湖が西関宿を離れてから十三年後の明治十一年（一八七八）一月で、当社中の喜多村富之助・同代吉・同藤蔵・同善右エ門・野村勘兵衛・小島新兵衛・小林勝郎の銘文が刻まれていることからこれらの人々によつて建立されたものである。

また、晴湖の菩提寺龍淵寺（現熊谷市上之）に顕彰碑「晴湖奥原君之碑」が建立されている。この銘文は、薄井が務め、碑名の揮毫に木戸孝允の子息孝正と山口香溪の名前がある。

(七) 女流南画家晴湖江戸での生活について

前述の元治二年（一八六五）の春に西関宿を立った晴湖は、江戸上野池之端仲町の岡村屋に仮住まい、ほどなくして上野摩利支天横町に移転した。この頃から「晴湖」の号を用いた。その後、実父池田が買い求めた仲御徒町三丁目三十八番地（後に地租改正で同所三丁目七十四番地となる）に再移転して画室を「墨吐煙雲楼」（ぼくとえんうんろう）を設けた。

晴湖は画家をはじめに際して、同年十二月三日に不忍弁天島の吉田屋亭に当時著名人の画家と書家二十五人を招いて、披露宴をあげている。参会する者の中には漢詩人の大沼枕山（一八一八〜九一）・書家、詩人の関雪江（一八二七〜七七）・書家の松岡環翠（一八〇九〜八七）、福島柳端（一八二三〜九三）・服部波山（一八九四）・詩人の篠田雲鳳（一八〇九〜八三）

の名が記されている。

晴湖は慶応四年（一八六八）の一月に、世情不穏回避のため、一時江戸を離れて上川上村（現熊谷市）の稲村家に寄留している。そして上野国の一の宮、高崎、倉ヶ野を巡り、四月に画室「墨吐煙雲楼」に戻った。この年の暮れ、幕末時における薩長同盟の締結や、版籍奉還、廃藩置県で日本の近代化の役割を果たした木戸孝允が来訪し、晴湖の作品を賞賛し漢詩を認めた。以後、木戸孝允の庇護の下、女流南画家として江戸（東都）に名を馳せることとなった。

この頃、関宿藩の奥原家では、藩主久世廣周の亡き後、藩士奥原秀之助廣定が藩内抗争によつて佐幕派となり藩を脱走し、万字隊に加入して上野山彰義隊戦で戦死した。

また、奥原晴湖の略年表によると、小杉てる（十五歳）が、晴湖の門に入り、後に養女となつて奥原「晴翠」と号したとされている。「小杉てる」については、晴湖の実父政明の生家小杉家の人とも考えられるが、詳細は不明である。

晴湖が三十七歳の年、明治六年（一八七三）秋、制作の「花卉図」「大蓮図」に「東海晴湖」と書いている。この署名は明治二十六年（一八九三）頃までの作品に頻繁に見られた。いわゆる晴湖の「東海描き」と称される、奔放な作品群が産みだされる時期である。

本作品が世に出てから四年後の西南戦争勃発と時を同じくして、晴湖の良き後援者であった木戸孝允が京都に於いて没した。

明治十五年（一八八二）五月に、フェノロサ、龍池会の委嘱による講演会で「文人画」、「洋画」が排斥され、「文人画」の凋落が顕著となった。翌年、上野・熊谷間に鉄道開通、これを契機に、晴湖は次の熊谷時代に繋がる作風として「梅株花開図」の作品を制作した。

またフェノロサ等によつて排斥されていた洋画も、岡倉天心

などの革新的な性格を持つ画人によって復活され、清湖ははじめて洋画の技法を取り入れた清新な「墨堤春色図屏風」の作品を制作した。

(八) 晴湖の熊谷隠棲について

明治二十四年(一八九一)二月十六日に、晴湖は二十六余年間過ごした東京を去り、知己の稲村家を頼って成田村上川上(現熊谷市)へ移り、新居が完成するまで稲村家に寓居した。完成した新居室には「墨吐煙雲」の額を掲げ、堂号には「繡佛草堂」「繡水草堂」「寸馬豆人楼」などを用いた。以後、熊谷で隠棲生活を送る中、筆の勢いに任せた奔放なものから、濃彩、細密なものへと画風は変っていった。

「東海晴湖」署名の回帰を証する作品「観音園」(藤懸静也)『奥原晴湖画集』・「花鳥図(傲華岳)」は晩年に描かれている作品として高く評価されている。明治四十三年(一九一〇)に「東京市本郷元町二ノ六十六」の住所で、晴湖の名が「日本現代書家名鑑」に初めて掲載された。

大正二年(一九一三)七月二十八日に埼玉県北埼玉郡成田村上川上(現熊谷市)で没し、享年七十七歳である。龍淵寺(現熊谷市成田)に葬られ、法名は「顯功院護山晴湖大師」である。なお、昨年、二〇一三年は、晴湖没後百年の年に当たる。

むすび

奥原経重日向守の家譜については、「徳河(川の誤り)公御代久世家御代」(寛保四年)の資料によると、久世氏七人衆に「奥原、亀井、下川辺、加藤、水野、高木、野村」と記されている。ところが、久世廣之の関宿城主に就任後、重之、暉之、廣明、廣誉、廣運、廣周と城主に就く中、七人衆の内、奥原氏・水野氏・高木氏・野村氏の四名が一度も藩中の家老、城代、中老役職に就かなかつた。今まで奥原氏が家老職の任にあつたと伝承

されているが、現在記録されている資料は見当たらない。

一方、奥原源次左衛門廣備家と池田晴湖家との家譜関係については、本稿では清湖が奥原家への養女入籍の経緯は名目上であつたことが明らかになった。但し奥原家に関する資料が乏しく奥原家の家譜については全容解明が出来なかつた。

謝辞

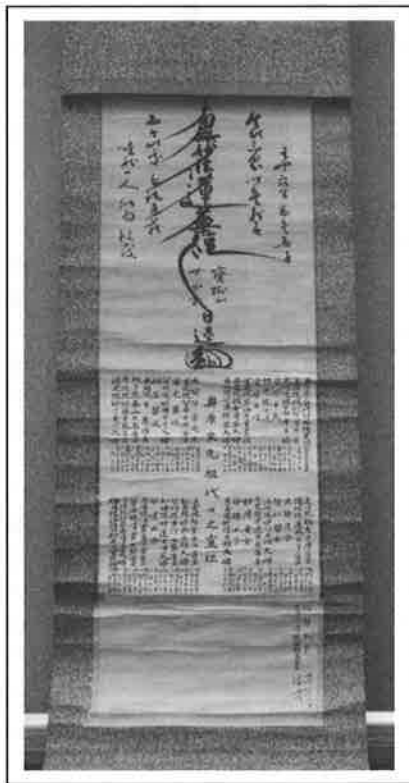
本号の執筆に当たり、奥原信氏、大野要修氏(関宿実相寺住職)、原太平氏(幸手市教育委員会社会教育課)、上原武雄氏(千葉県立関宿城博物館サポーター)等の方々に多大なるご協力頂きましたことを深く感謝申し上げます。(了)

参考文献

- 奥原晴湖展 平成十三年二月十日 編集発行茨城県立歴史館
奥原晴湖展 没後一〇〇年記念 平成二十五年十月二十五日 編集発行古河歴史博物館
画賛から見る奥原晴湖 川島恂二著 平成三年六月十二日 発行所りん書房
奥原晴湖―古河の女流南画家― 川島恂二著 一九八五年二月十五日 発行所筑波書林
幸手の石造物Ⅲ 平成十九年三月九日 発行幸手市教育委員会
新訂 寛政重修諸家譜 八 平成三年十二月二十五日第七刷発行 発行所(株)続群書類従完成会
幕末維新人名事典 平成六年二月二十日発行 発行所(株)新人物往来社
大日本人名辞書 昭和五十年三月一日発行

幕末藩主事典 第二卷 関東編、第四卷 中部編Ⅱ 平成元年十
一月五日発行 発行所 雄山閣出版株式会社
関宿藩士系略 天保二年辛卯孟春 中鶴家文書 関宿城
博物館寄託資料

(なかむら まさみ 当館展示協力員)



2. 奥原経重日向守先祖代々霊位



1. 奥原経重日向守系の墓(実相寺)



3. 奥原源次左衛門廣備系の墓(関宿実相寺)



5. 奥原晴湖作品 溪園清趣図(「奥原晴湖展没後100年記念図録」14頁編集発行古河歴史博物館 より)



4. 奥原晴湖の顔写真(「奥原晴湖展没後100年記念図録73頁」編集発行古河歴史博物館 より)



6. 六神社両足尊惶根尊(幸手市) 上下共

